

アレルギー専門店で通う保護者を対象とした アンケート調査

熊谷 亜海

目的：食物アレルギーの重要性については論を待たない。これまでも行政や病院、学校などによる取り組みが行われ、10-20年前とは取り巻く環境が大きく変わってきている。一方でこのような取り組みを下支えする基礎的データは保育園や学校などで得られた横断調査によるものが多く、例えば近年増加傾向にあるアレルギー専門店で通う人などを対象に行われたものは見当たらない。しかしながら学校や保育園などで行われるアンケートと比べ、専門店や小児科などへ通う理由がある方々へ行われるアンケートでは、アレルギーに対する社会への思いや、食に対する実態が深刻かつ多岐にわたるものと考えられる。

そこで今回は、アレルギー専門店で通う保護者等の抱えるニーズを明らかにする目的で実態調査を行った。

方法：仙台市内にあるアレルギー専門店で通う人を対象として、食物アレルギーに関するアンケート調査を実施した。回答人数は50人で、誤記入の無い者は49人であった。このうち今回の集計では親にアレルギーが無く、子にアレルギーのある41人を分析対象とした。研究デザインは混合研究法とし、まず主成分分析の結果から回答者を三群に分けた上で、自由意見1「困難に感じること」、自由意見2「社会に望むこと」において、群ごとの特徴が存在するのかを確認した。自由意見の集約にはテキストマイニング法（KH coder）の対応分析を施した。

結果：主成分得点の結果より高等度悩み群、中等度悩み群、低等度悩み群の三群に分けて比較・検討をしたところ、自由意見1「困難に感じること」では兄弟や本人に自由に食べさせてあげられなくて申し訳ないと思っている意見が高等度の悩み群で多く、自由意見2「社会に望むこと」では周りからの理解を求めたいとする意見が同群で多かった。

結論：子のアレルギーのために専門店で通う親の悩みは深刻かつ多岐にわたり、現代社会に決して納得していない実情が明らかとなった。